

〈 書評論文 〉

「サブカルチャー」の舞台裏にある日常

—「詩のボクシング」ある朗読ボクサーの事例から—

伊奈正人『サブカルチャーの社会学』
(世界思想社、1999年)

尾添 侑太

1. 本書概要と問題の所在

本書は、3部8章構成となっており、扱うテーマはタイトルが示すとおり「サブカルチャー」である。本書でいうサブカルチャーとは「雑多で、しぶとく、たくましい魅力のあるもの、あるいは「裏」の、あやしげで危険な魅力を発散するもの」に加え、「政治・経済・社会のシステムからある程度独立し、自律性を持つものの、それに依存、従属、ないしは寄生する文化」(pp. 2-3)と定義されている。そして、本書が目的としているのは、「サブカルチャーのサブカルチャー」「サブカルチャーの知」という2つの主題について枠組みを提示することにある。

サブカルチャーをテーマに論じるにあたって、伊奈は稲増龍夫とのやりとりに絡めて、宮台真司の議論を引き合いに出しながら、上述した2つのテーマの前提となる「サブカルチャーはなくてもいいのか」という問いに答えようとしている。では、「サブカルチャーなど必要ない」といった場合、そこで何が失われてしまうか。それは「サブカルチャーのサブカルチャー」が抱える問題の位相である。本書では、後述する「地方のサブカルチャー」や、「障害者のサブカルチャー」「老人のサブカルチャー」がそれに該当する。伊奈は、障害者や老人が「サブカルチャー」を切実に求め、またそこへ参画していくという面の重要性を論じるとともに、そこに過剰な意味や価値を見出すのではなく、それを記述・分析する際にはあくまでも冷静に行う重要性も同時に指摘している。

一方「地方のサブカルチャー」からは何が言えるか。問題は、地方のサブカルチャーの有無の問題ではなく、「外国」「東京」といった「中央」への意識の問題である。地方にいる者は、中央への意識によって「サブカルチャーへの渴望」を絶え間なく再生産し、「地域性の呪縛」から逃れることができなくなる (pp. 16-17)。また地方文化とサブカルチャーを織り交ぜるような運動において問題となるのは、結局はサブカルチャーの「脱地域的特性」を殺してしまい、閉鎖化することによって魅力の多くを消してしまうことである。宮台真司は安直な「理想論」を「雑種的なもの」「サブカルチャー的なもの」と結びつけることは避けつつも「脱地域」という観点からサブカルチャーの担い手たちの

「自在さ」といったものなどの内実を「ライフエリア」や「居場所」の問題として具体化した、その超えるべきしがらみの内実は高度経済成長に伴う「郊外化」であった。それに対して伊奈は、「地域」という観点からサブカルチャーを考えるさいに重要となる点は、「中央」への「こだわり」や「焦り」から自由であると同じように「地域」に対する「こだわり」や「しがらみ」からも自由であることとし、しがらみの内実を「東京一極集中」「東京かぶれ」の問題としている。また伊奈は、電子メディアの発展に代表される「マルチメディア」という観点も、「脱地域」の問題を考える際に重要であるとし、文化行政への批判的意見とは異なる「メディアなきマルチメディア化」という方向を見出そうとする。それは、サブカルチャーの「場」において、既存の関係とは異なる新たな「つながり」の存在である。

2つ目の問題である「サブカルチャー的な知」について、はじめに伊奈は中野収の「大衆文化論」と「メディア」の関係にかんする論を考察に挙げている。中野は70年代以降のテレビにおける表現スタイルの変容に「メディアの成熟」を読み、「メディアの双方向性」を見出す。そして伊奈は、中野の「社会」が「テレビ化」という論に注目を向け、ビートたけしやタモリの事例を紹介しながら、それを「知」「社会」の「サブカルチャー化」と言い換えている。つまり、サブカルチャーは「下位」であることには変わりはないが、一定の自律性を確保しており、「メディア化」する社会において独自の「知」の形式を生みだし、社会を「サブカルチャー化」する。

最後に、2つの主題的問題の関係を、ミルズの「文化装置」という概念を用いて説明している。ミルズにならえば、それは人々に衝動や欲し方・感じ方の規則から「真善美」という価値体系までを幅広く与え、人間がそれを通して出来事をみる際の「レンズ」である。この「文化装置」を取り上げたいくつかの研究のうち、伊奈は奥村隆の問題提起に注目する。奥村の議論は、大村英昭の「煽る文化」と「鎮める文化」という対置に、それぞれ「加熱する文化装置」と「冷却する文化装置」を援用してまとめたものである。そして、先述した「中央—周縁」の構図や、「中央」へと人々を駆り立てるものが「加熱する文化装置」であるとし、それに対して「サブカルチャー」を「冷却する文化装置」として設定することが可能かどうかということを考えることが、「サブカルチャーのサブカルチャー」を見通す際の問題意識であるとしている。対して、「社会のサブカルチャー化」にかんしては、そのような「冷却する文化装置」としてのサブカルチャーの展開をミルズ研究の観点から詳しく考察していく。加えて、「冷却」面だけでなく、「遊—俗—聖」という図式から「遊びの文化」をどのように位置づけるかに関して、「加熱」面にも注目して検討する。

評者は、どこかいかかわしく存在・存続しており、「知る人は知っている」「行けば面白さがわかる」といったような、その中で行われている文化実践の内実を表にあらわしにくい事象といったものが、どのようにして外部＝日常とのつながりを持ちえるのかという問題を本論において考察していきたい。「詩のボクシング」という文化活動を通して、伊奈と異なる視点から「サブカルチャーのサブカルチャー」のもつ可能性や「面白み」を提示したい。

2. 要約

2部4章においては、第一の問題となる「サブカルチャーのサブカルチャー」が論点の中心となり、「周縁の周縁」「サブカルチャーのサブカルチャー」という観点から、「中央」へと「煽り」「駆りたて」「焦らせ」「こだわらせ」「オーバーヒートさせる」ような「加熱する文化装置」の実態、また

それとうまくつきあうためにどのような「つながり」「チャンネル」「知のスタイル」が用いられているかを検討する。「上京文化」とは最先端への憧れ、田舎臭さからの脱出が、地方にいることの不安や焦燥を生み出し、大量の人員を「中央＝東京」へと駆りだすもので、高度経済成長期に大都市圏中心の社会経済システムが成立しだし、地域文化は廃ることになる。伊奈は、このような「中央」と「周縁」の図式において、松田素二が「ソフトな抵抗論」によって地方都市の可能性を示唆していることを参照している。松田は、70年代以降、中央における権力によって生み出された弱者に視点を移し、「受け身で語られてきた弱者の能動性」に注目しながら、「中央—周縁」という二極図式を再生しようとすることを指摘している。そこで、「体制—反体制」という図式で括られる関係の経路（＝ハードパス）に対し、日常生活のなかの微細な権力（＝ソフトパス）に注目した。

松田が示した図式を援用しつつも、一方で伊奈は、多様化という意味では同じでも、「地方文化」とは異なるものとして「もう一つの地域文化」を挙げ、その多様性を説明するものとして「文化シーン」という概念を提示している。「文化シーン」とは、サブカルチャーと接触する「場（所）」のことである。「もう一つの地域文化」の特徴としては、「観客（＝自己呈示される対象）」の全国的、またはグローバルなつながりを前提としており、地域を足場としながらも、そのようなつながりの中に「場」を置いている点にある。そこで伊奈は、音楽分野における「文化シーン」の多様化を確認しつつ、同様のことが別の分野においても言えるのではないのか、また、「文化シーン」を「使い分け」「使いこなす」ことは様々な「地域文化」においても確認できることではないかという仮説的問題を設定している。事例として岡山における映画上映運動、創作活動の事例調査に焦点をあて、「地域文化としてのサブカルチャー」がどのような意味や問題を持ち、また可能性と困難さを持っているのかを明らかにすることを目的とした。

2章では、「シネマクレール」という岡山では初となるアート系ミニシアターを設立した浜田高夫と、同じく岡山の県職員をしながら上映運動に携わっている真田明彦へのインタビュー調査を中心とし、彼らを「ソフトパス」を使いこなす担い手たちとして描き出している。3章では、小川孝雄の活動を検討しながら、60～70年代にかけて形成された「対抗文化」を「インディペンデント」という用語を用いて説明することを目的としている。小川は「残像舎」という組織での活動を経て、新たな「インディペンデント・シーン」を次々と創りあげていく。「映画を語る会」という文字どおり映画を自由に語り合う場をつくり、「映画時代」という雑誌も刊行した。また、真田らも参加した既存の枠を超えた企画として「映画の冒険」を始動させる。このようにして「インディペンデント・シーン」における「つながり」を広げていくなかで、「横のつながり」と結び合い、自らが「つながり」を創造してゆく可能性や多くの人が多様なかたちで映画とかかわってゆく可能性などを小川は強く主張する。ハードパスの組織的に硬直した体系から自由に「つながり」と創造していく可能性を「インディペンデントなもの」は持っており、「文化的なハンディキャップ」と捉えられているもののなかに、新しい「文化シーン」を創造していく可能性が見出すことができるのではないかと考えるのである。4章では、マルチメディア・クリエイターとして岡山で活動する能勢伊勢雄を取り上げ、前章の「インディペンデント」なものの一つであると同時に、その中のより挑発的で過激な側面である「アンダーグラウンド・シーン」の検討を行う。能勢の創作におけるスタイルは「マルチメディア」を基礎としたラディカルなものである。その一方で、様々なインフォーマルな回路を通じて、人々が自由につながることが可能であるという「共同性の探求」は、前章までに登場したそれぞれの運動の担い手の信条と活動の目指すべき地点と共通するものがあり、関連し合っていると見える。5章では、2～

4章の活動が岡山市街地（地方の中心）におけるものだったのに対し、「地方の地方」の考察が対象となり、この地で地元の住民の溜まり場となっている小さな店を経営する野村智美のインタビュー事例が中心となる。

後半3章からなる3部では、本書の第二のテーマである「サブカルチャーの知」が中心となり、前章までの事例から理論パートを構成している。6章では、「大衆性」「サブカルチャー」「プラグマティズム」という三者の関係性を論じている。その中で、鶴見俊輔、トックヴィル、ミルズなどの理論を援用しつつ、アメリカ的な知のあり方とヨーロッパ的な知のあり方の関係とその移り変わりを指摘する。7章では、引き続き「サブカルチャー的な知」というテーマのもとに、ミルズを中心としてその理論的考察を行っている。8章では、「マニュアル知」というものを例にあげ、「サブカルチャー的な知」の解説を行う。

以上までが各章の要約である。以降、本書の分析に移る。

3. 伊奈の分析と事例の関係

伊奈が本書を通して導き出そうとしたのは、若者文化や対抗文化など一般的に誰もが想像するようなわかりやすく名称が認知されている「サブカルチャー」に対して、そういった範疇だけにはとどまらない「下位」にあたる文化を「サブカルチャーのサブカルチャー（周縁の周縁）」として捉えようとするものであった。彼がこの問題を考えるにいたった契機は「サブカルチャーなどなくてもいい」という見方に対して、「そうとは言い切ることができない」という一種の抵抗を示したかったからである。なぜなら、サブカルチャーを不要だとする視点では、必ずそこからこぼれ落ちるものが生じてしまうからである。たとえば、伊奈は本書において、「下位の下位」に位置づけられる例として障害者や老人を挙げている。そして、彼／彼女らにとってのサブカルチャーの必要性、またサブカルチャーが彼／彼女らの「生、のフォルム」の形成に対してもつ重要性を論じ、そのような立場にある人たちの「渴望」を掬い取ろうとしている。つまりそれは何をサブカルチャーとするかという問題にもかかわるものである。

伊奈は、同様に「地方」を事例に「サブカルチャーのサブカルチャー」の問題の考察を試みる。これまで地方にサブカルチャーがないわけではなかった。しかしそこで問題となるのは「地方」にいるものは「中央」への自意識から逃れられないでいたことにある。「遅れていること」「田舎くさいこと」は、「サブカルチャーへの渴望」を絶え間なく再生産していき、そのような中央に対する不安や焦燥という自意識は、「地方のサブカルチャー」を「どこかゆがんだもの」にしてきたという。また、地方の文化とサブカルチャーを混交しようとするときにも、「中央」への自意識の解決なくしては、「地域性の呪縛」から解放されることは難しい。たとえば岡山弁を台詞に使用する舞台を演じる劇団のように、「脱地域的特性」という性質をもったサブカルチャーが、地域の中に絡めとられ閉じたものになってしまうことは決して少なくないのである。そこで脱地域的サブカルチャーの様相をまとめてみたい。「脱地域性」が指し示すものは、「中央」でないことだめである、または「地域」でなければだめであるといったような「中央」に対する自意識や「しがらみ」から解放されることといえる。その例として伊奈は、カンヌ映画祭で受賞した映画監督の河瀬直美を挙げ、受賞後も奈良に住みつけ、東京と往還するというスタイルに「脱地域」の可能性を見出している。それは「地域文化」などを「下位（＝サブ）文化」として置き、解放されるべき「しがらみ」の内実を見ていこうとする

ものである。また、古くからの伝統的な「地方文化」とは区別されたものとして「地域文化」を規定している。

ここでまずおさえておかなければならないのは、上述した「中心と周縁」をめぐる議論である。磯田光一は戦後日本が「東京の地方化」と「地方の東京化」という「二重構造」を成立させてきたと指摘し、伊奈はそのような「中央志向」の文化を「上京文化」と呼ぶ。「地方」にいることの焦りが大量の人員を「中央」へと移動させ、「経済成長」「近代化」を推し進めた一方で、地域社会や地域文化を荒廃させた。そのような時代背景の中で磯田が問題としたのは、都市化がどれだけ進んだとしても「近代的個人」としての「^レ生、のフォルム（生の核となる価値）」が形成されにくいことであると、それを唯一可能にするのは「保守」的スタイルであるとした。それに対して伊奈は、松田の議論を援用しながら異なった見解を示している。松田はそれまでの「中央—周縁」の二極モデルを吟味する中で、「受け身で語られてきた弱者の能動性」に視点を置き、二極図式の再生をはかる。そして、70年代までの対抗文化＝「ハードな抵抗」が「体制—反体制」という関係（ハードパス）を経路にしていたのに対し、70年代以降はそれまで注目されてこなかった日常生活実践のなかのミクロな権力（ソフトパス）を経路とした「ソフトな抵抗」論へと変容したことを論じ、「周縁都市はこうした種々の抵抗の展開によって、新たな文化創造の拠点となっている」と述べる。伊奈は、そのようなソフトパスとハードパス双方の関係性と、それらと「^レ生、のフォルム」とのかかわりや「対抗」の論理を、「地方」におけるサブカルチャーを材料として分析しようとする。

伊奈が「地方」と「地域」を区分けするさいに重要になるのが「文化シーン」という概念である。これは「サブカルチャーの担い手が活動する「活動場」「居場所」のこと」であり、「物理的場所や地域のみならず、比喩的な意味」も含んでいる。そのような「シーン」における「自己呈示」をする側とそれを観る側の構図が、地域文化の多様性を明らかにする意味で有効であるとしている。「観客」が外部から一方的に文化を享受する地方の文化とは異なり、「観客」の全国的・グローバルな広がりやつながりの中に「地域」の足場を置き「文化シーン」を創造する場合において「もう一つの地域文化」を対置する。たとえば伊奈が具体的に参考しているのは、ポピュラー音楽における「コミュニティ」と「シーン」の対比である。前者は特定地域の内部に閉ざされたものであるゆえ、歴史や伝統とむすびついているのに対して、後者は特定地域内に拘束されるわけではなく、より自由に開かれ様々な文化が同時共存し、また内容も変容しやすい性質をもっている。つまり、伊奈はこれまでの地方文化とは別の「地域文化」を「文化シーン」の多様化という観点からの考察によって試みているといえる。

以上のように、本書において伊奈が目指そうとしているもの、またそこに至るまでの背景をまとめたが、「サブカルチャーのサブカルチャー」「周縁の周縁」という視点から見えるものに光を当てることによって、それまで問題にもされてこなかった事象を浮かび上がらせたことは非常に評価できる点である。「なくてもいい」と考えられているものが孕む見過ごされやすい重要な問題を、日常の文化実践のなかから掘り取ろうということは評者の関心とも大きく重なるものであるし、参考になる点も多くあった。しかし、「詩のボクシング」という「サブカルチャーのサブカルチャー」をフィールドとしているからこそ、本書を通した伊奈の論点にいくつかの疑問や不足を感じてしまうのである。そこで評者自身の事例を論じるまえに整理をおこないたい。

グローバリゼーションを均質化・標準化のプロセスであると捉え、個性的なものが地域社会から消え去っていくことへの危機感から、ローカルな「地域」はそれぞれの村おこしやまちづくりなどロー

カルな固有性を掲げることを通じてさまざまな試みをおこなってきた。本書に登場する宮台真司も地方における超えるべき「しがらみ」の問題を「郊外化」というグローバルな現象から捉えようとしたし、三浦展の「ファスト風土化」（三浦 2004）に関する議論も地方都市郊外のグローバリゼーションによる均質化の問題を挙げている。対して伊奈は「郊外化」ではなく「上京（洋行）」といったものにまなざしを向け、地域内に閉ざされた発想に支えられた固有性の発見とは別に、地域外にも開かれたサブカルチャーとの結びつきからなる地域アイデンティティーに焦点をあてることによって、「地域」に生活することに対する「気恥ずかしさ」からの脱却を図った。

しかし、まず第一点に「サブカルチャーのサブカルチャー性」「周縁の周縁性」によって浮かび上がってくる事象に注目することは重要なことであるが、それを示すことだけで「下位の文化」を包括的に論じることにはならないのではないかという問題がある。たとえば、本書で最初にあがった障害者にとっての性風俗の事例に現れ出るような問題は、「地方のサブカルチャー」の在り方や可能性からどのように捉えなおすことができるか。つまり、社会の流動化がますます強まるなかで、周縁の周縁性をどこまで論じきれているのかが一つ目の問題である。第二に、伊奈の「文化シーン」という概念を用いた多様な広がりをもった「地域文化」の可能性は、特定の地域の自意識やしがらみを超えるという意味で空間の限界を乗り越えるものとして提示されている。これは本書で最も重要な論点である。しかし、そこで考えなければならないのは、各地に存在するさまざまな文化実践—とりわけ、「サブカルチャーのサブカルチャー」のような文化活動—は、当然本書で紹介されている岡山における事例にとどまらず、あらゆるところで生まれ、常に変化ないし消滅している。さまざまな広がりを持ちながら空間的限界を乗り越えるという意味では一定の「成功」を果たしているといえる事例でも、その文化実践なり文化活動がその後の経過の中でどのように変化していくかというプロセスにも目を向ける必要があるだろう。その意味で、伊奈が当然まったく考慮に入れていないわけではないのであるが、時間軸の問題を考えてみたい。それに関して重要となるのが、「サブカルチャーのサブカルチャー」の場を創り出す担い手たちだけでなく、その場に集い利用する人びとの思いや感情などを考慮に入れることである。むしろ、これは第一の問題に挙げた障害者のサブカルチャーにおいては視点となっていたものである。つまり、伊奈の事例研究における「参与観察」で評者が物足りなさを感じる部分は、複数の文化の作り手たちに焦点をあて、その文化実践の成り立ちと関係を詳細に記述し、それを「地域文化」の可能性を高めるものとして提示していることは評価できるが、その可能性がどれほどの持続性をもって流動化が進む社会にとって有効であるかということを見る必要がある。そのためには、その場を創り出す者／その場に集まり利用する者／その場から離れていく者といったような「参与」する人びとが抱いているさまざまな感情を描き出すことが不可欠である。参与観察については鶴飼正樹が次のように述べている。

参与するなかで何かが見えてくる、その見えてくる何かを足がかりとして、その集団なりあるいはより広く社会なりを考えること、集団のなかで、その集団の実態を把握するだけでなく、社会を、世界をそこから逆に照射すること。（鶴飼 1991）

これは参与観察が、観察者であり対象者であるという方法論的な問題に対する批判に対して、鶴飼がみる可能性である。参与することでしか見えてこないリアリティから社会の動向を分析・考察するスタンスは評者も同様であり、伊奈も評者もインタビュー調査を軸とした参与観察という方法論を採

用している点では共通している。伊奈は、岡山という地方における映画上映活動の中心人物が行った実践を通して、「サブカルチャーのサブカルチャー」という場がいかに地域や地方に住む人びとが抱く「生きづらさ」を克服する文化装置として働いているかを明らかにした。それに対して評者は、自身もその活動に参画し、そこに集うさまざまな個人個人との関係性を築くことによって、「サブカルチャーのサブカルチャー」という場がどのような場として機能しているかということをも明らかにすることよりはむしろ、集まる人びとがどのような日常的な苦悩や生きづらさを抱きながら生きているかを明らかにしようとする点で異なる。つまり、伊奈の視点というものは「サブカルチャーのサブカルチャー」という枠組みを提示することであるのに対して、評者はそこに集まる者たちが抱えるバックグラウンドやライフヒストリーを通して、文化が周縁の周縁においてどのように営まれているかということ考察する。

4. 「詩のボクシング」—ある朗読ボクサー A のインタビュー調査から

「詩のボクシング」は、音声詩人・映像詩人である楠かつのりが、アメリカを訪れたときに出会ったあるイベントを見たときに衝撃を受け、「ぜひこれを日本でやってみよう」ということで日本に持ちかえったリーディング・イベントである。しかし、現代詩（またはそれまでの詩の世界の潮流）は、「詩を戦わせる」「声に出して読む」という大会の基礎となる要素を認めていなかったため、多くの強い反対を受けたという。楠は、そのような状況の中で「詩」というものに漂う「閉塞感」をなんとか打ち破りたいという思いで、ごく一部の賛同者の協力をもとに『日本朗読ボクシング協会』を立ち上げる。日本における「詩のボクシング」設立となる1997年のことである。設立当初は、楠をはじめ、ねじめ正一や谷川俊太郎などの詩人を中心とする活字のプロたちによるものであったが、1999年に「詩は誰もが持っている、それを聞きたい」とプロたちの大会を、一般人が参加可能な大会へと変更させる。プロ大会の派手な演出やテレビ放送などをしたことがきっかけでかなり多くの人々の興味を抱き、現在の形式の大会は毎年全国大会が開かれる規模にまで成長をしている。概要は以上である。

伊奈は「サブカルチャーのサブカルチャー」という視点で、「周縁の周縁性」を描き出そうとした。それは「サブカルチャー」というわかりやすく「表現」されるものを見るだけではこぼれ落ちるものがあるからであり、「サブカルチャーのサブカルチャー」からにじみ出ているような「表出」の部分を読み取ろうとした。そのような関心は評者も共有している部分である。文化実践において、実際にその中で人びとがどのような営みをおこなっているかということは表に出てきにくいものが多いからである。ただし、伊奈の考察では「サブカルチャーのサブカルチャー」の中でさらに表にわかりやすく出てくるものに焦点を当て、さらにその内にある「表出」の部分にまで考察が及んでいない—「サブカルチャーのサブカルチャーのサブカルチャー…」という相対化—という批判をまぬがれることができないだろう。そうであるとするならば、周縁にさらなる周縁性を対置するのではなく、調査者の参与の方法やコミットメントによって表れる周縁的なものが醸し出すリアリティの深みや広がり、より普遍的なテーマとの関係性が浮かび上がってくるに違いない。

そこで伊奈とはまた違う地点からその問題を見るために、その「表現」の背景となる舞台裏、つまり表現する者の日常に目を向けたい。評者はこれまで「詩のボクシング」をフィールドにし、その中で行われる表現様式に注目し、それをコミュニケーションの観点から考察してきたが、現在は表現を

めぐるコミュニケーションの様相をさらに深く考察するために、参与観察を通してこそ見えてくる対象者のバックグラウンドやライフヒストリーにも注目している。ただし「周縁の周縁」として存在する「詩のボクシング」そのものを対象とするのではなく、その表現が成立している舞台裏に存在している人々の日常生活を対象とすることによって、彼らの表現からにじみ出る「周縁の周縁性」がさらに面白みをもって立ち上がってくるはずである。

朗読ボクサー A のライフヒストリー

今回、焦点をあてる A はインタビュー当時24歳の男性でフリーターである。評者が参戦した兵庫大会予選会で、予選会を終えて一人で観客席にいたところ、評者の自作詩に共感したと声をかけてきてくれたことが知り合ったきっかけである。「詩のボクシング」を対象に研究しているということを通り、インタビュー調査での協力を願ったところ、「自分にできることなら」と快諾してくれた。彼が出場している兵庫大会はこれまですべて姫路市で行われている。姫路は、A にとっては生まれ育った故郷である。フリーターということであったが、インタビュー直前に滋賀県での大手車メーカーの工場勤務の仕事を辞めていた。それまでも何度か職を変えたと言う。「詩のボクシング」に参加するようになったのも比較的最近のことである。大会運営に特別深く関わっているわけではないが、その面白さは今までに無かったものとして評価しており、2年連続で兵庫大会の本戦に出場している。彼が自分の言葉を表現する際に用いる様式は Rap である。「詩のボクシング」以外にも Rap Battle などにも参加しているという。

A はインタビューにおいて、「詩のボクシング」をどのようなものとして捉えているかを語ってくれた。それはまず第一に A にとって、「ただ自分の意見を主張したい」という欲求を満たしてくれる数少ない「場」であるということ。A は彼なりに日本の現状を海外と比較しながら次のように述べている。「(詩を)書いた人が、たとえば路上なりなんなりで読み上げるっていうこと自体がほんまに日本じゃあんまし受け入れられない文化なんですよね」。海外では多様な形で行われている「詩や Rap というものを表現したいが、日本にはそのような場所がない」という。彼の「夢」はそういった自己表現で「金稼いで、飯食って」いくことである。本当に「プロの表現者」を目指しているかどうかは定かではないが、ある種の上昇志向の持ち主であることがインタビューを通して伺いしれた。少なくとも決して日常生活に満足しているわけではない。「朝起きて、仕事行って、んで、夜帰ってきて寝る」生活は退屈なものであると同時に、自分の周りにある社会や世界に限定されてしまう。「詩のボクシング」は、「主婦とか先生とか職業柄色んな人がいて、その人その人の生活スタイルっていうのがあって、そこから自分にはないものを学べれる」場である。彼は、別の言い方でそれを「修行」「自己証明」と称する。また、普段の生活で文学としての詩に思い入れがあるわけではない。むしろ詩における表現や理念は高尚なものであるという固定観念を捨てるべきだと主張している。「高く持ち上げすぎやと思うんですよ。難しく考えずに、その詩の楽しさ、人に伝えることと、自分が楽しく考えさせられるっていう風にとったほうがええと思うんですよね」。「詩のボクシング」は A にとっても他の参戦者にとっても、誰もが思い思いに表現できる場となっている。そして、日常では達成できない「他と違うということの同一性」を感じられる場としても機能している。

第二点目に、彼にとって「詩のボクシング」の「マイナー性」について意義を感じているということ。「マイナーやけど、ほんまにそのマイナーな分だけ、やっぱ質が高い」し、「質が高いからこそやっぱ少人数でもそういうのが面白いもんが出来上がる」。彼は大会がメディアに大々的に取り上げ

られ商業的に発達していくことに対して悲観的な立場をとっている。「詩のボクシングはテレビに押し上げられていない分、濃い情報もあり、濃い思想もあり、色んな人らの意見を直に判断できる」。しかし、一方で「詩のボクシング」に対して不満も抱いている。それはより多くの人が自由に参加できるものにするべきという点にある。「大会は大会として、月に一回都道府県なり色んなところで開催してくれた方がこっちとしては嬉しいし、色んな人と交流もてる」。Aにとっては、現状では「自己表現」「自己証明」の場としてはまだまだ開かれていないという認識である。Rap を表現として取り入れているため、Rap Battleにも参加しているというが、そこでは「相手をけなす＝ディスる」ことで勝敗なりを決定する。そしてまさにその点を疑問に思い、違う形での表現の可能性を「詩のボクシング」に求めている。「Rap Battle とかやったら金ももらえるし、名声も得られるし、CD にない作品とかを乗せれるチャンスっていうのもあるし、それはそれでいいと思うんすよ。けどやっぱ相手をけなして勝ちあがるっていうのが俺は違うと思うんすよ」。

ではそもそもなぜAがRapという表現を取るようになったのか。それには幼少時代に受けた「いじめ」がきっかけになっているという。いじめられていて何もできない内向的な自分を変えたいと思っているときにHip Hopの存在を知り、「もともと黒人やマイノリティなどが差別や圧政などに抵抗するために作り上げたという創造的な文化」に強い共感を得たという。「これしかない」と思ったのだ。評者はインタビューを行う前に一度だけ彼の作品を大会で聴いたことがある。Rapを表現様式に用いることは「詩のボクシング」では比較的珍しいので深く印象に残っていた。詳細は覚えていないが、その内容はどこか暗く、また何かに対する怒りや反発を帯びていた印象である。インタビューを通して、彼自身がいじめられたという直接的な経験や、そこから生じてきた何かに抑圧されていたり、意見や主張の表明を行っていくといったような「マイノリティ」への視点というものが背後にあるということがよく理解できた。「日本人の詩って、平安時代からあるじゃないですか？その時から貴族の文化として知られてたから、だけど、普通に農民とかそういう虐げられとった人たちもそういう風に作り上げていってるんはある」。彼にとって表現するとはそういうものであるのだ。インタビューを中心とした参与観察を通じるからこそ、その対象がこれまでどのような人生を送ってきたのかを知ることができる。そしてそこから、これまでとは違った形でAが詩を通じて戦う姿—「表現」—が浮かび上がってくるのである。

5. おわりに

「詩のボクシング」とAの事例を通じて見えてきたものは、「サブカルチャーのサブカルチャー」においてわかりやすく表には現れ出てこないような、コミットする者の「表現」の舞台裏（日常）である。それは「表現」に対して「表出」の部分と呼ぶことができよう。本書における伊奈の分析では、その「表出」の部分に光を当てその輪郭をくっきりと描き出している。しかし、評者は同様の関心を持ちつつも、両者の関係を表裏のように区別して捉えるのではなく、つねに混じりあうものとして考察を試みた。つまり、対象にコミットする者の日常が表にあらわれでてくる表現とどのように結びついているかということ考察の射程に入れることで、伊奈の「サブカルチャーのサブカルチャー性」「周縁の周縁性」の領域により深く切り込むことができる。その上で、今後の自分の課題として残されているのは、事例研究において参与観察を通して見えてくるリアリティの力強さを描き出し、それを足がかりにし文化実践や文化活動から流動化する社会で生きる人々の動的な営みを考察してい

くことであると考えている。

参考文献

- 伊奈正人、1998「西大寺井戸端会議：ある「文化シーン」の情景」『経済と社会：東京女子大学社会学会紀要』26、pp. 19-39.
- 松田素二、1996「都市の文化変容—周縁都市の可能性」井上俊他編『都市と都市化の社会学』岩波講座現代社会学18、pp. 171-188.
- 三浦展、2004『ファスト風土化する日本』洋泉社.
- 宮台真司、1997『まぼろしの郊外—成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日新聞社.
- 鶴飼正樹、1991「これは『社会調査』ではない—参与観察をめぐる五通の手紙」、仲村祥一編『現代的自己の社会学』世界思想社、pp. 94-108.

(おぞえ・ゆうた 博士課程後期課程)